

画面向こうに映る君

kwhr2069

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

将来の夢。

自分を見失いかけたその少女には、具体的なそれが想像できなかつた。そして、もう一人。

その女性は、自身の夢を一度は追いかけたが、現実を知り、挫折した。あることをきつかけに出会ったこの二人は、思いを通わせていき――。

これは、アツイ夏の真っ只中に巻き起こる、一つの物語!!

ということで、HBP第四弾がやってきました。

今回も、ラブライブ！サンシャイン!!のストーリーから約二年後の世界を描きます。善子は高校三年生、にこは社会人二年目くらいの年です。

*これは、ラブライブ！サンシャイン!!をラブライブ!の四年後の世界だと考えた上で、の年齢になっています。

キャラクターをアニメ通りに描けているかどうかは微妙ですが、そこは年が経っているからということでお許しください。

原作ラブライブ！シリーズとして第一弾〜今回の第四弾まであります。

気になった方は、過去作のほうもよければ読んで下さると大変嬉しいです。

批評とか、感想とか、お待ちしていますので、気兼ねなくどうぞ。

目次

善子 s i d e	1
私の夢は	13
に c o s i d e	26
そして私たちは	36

善子side

私は、悩んでいた。

それは、多くの人々がぶつかるであろう問題。

そんなものに、例に漏れずぶつかってしまった私。

私は、どうすればこの悩みを解決できるのか、全く分からない。

むしろ悩めば悩むほど、どんどんと下の方へおちていく感覚。

下の方へ、おちていく。

そう。それはまるで……。

「……………、……………ん、…ちゃん、…善子ちゃんってば!」

「うわ!」

突然近くで声が聞こえ、驚いてそつちを見る。

「…で、なんだ、ずら丸じゃない。どーしたのよ?」

「どうもこうもないずら。さつきからブツブツ言つて、皆気味悪がつてるんだよ?」

「…え?」

そう言われて周りを見ると、確かに皆が引いているように見えないことはない。

「……」

思わず黙りこくってしまおう。

「…また変なこと考えてたんでしょ」

ずら丸に耳元で、そう見透かされたように言われる。

色々言われるのもメンドーだ。

こういう時は、そっぽを向くに限る。

「はぁ…」

あからさまな溜息をつかれ、思わずそつちを見てしまいそうになったが直前でとどまる。

「…まあいいぞら。じゃあ善子ちゃん、また明日ね」

「ええ、そうね…って、もう帰るの？」

「何言ってるぞら。先週から私が塾に通い始めたの、忘れちゃったの？」

「あつ、そうだったわね…。ついうっかり」

「ふふつ、変な善子ちゃん。じゃあ、またね」

「ええ、また明日」

そう言って、ずら丸を見送る。

なんともいえない孤独感が、私を包む。

気付けば教室には、わずかしか人は残っていないかった。

「…私も帰ろ」

そう呟き、私は席を立った。

* * *

帰宅して。

私は、ある事に気付いた。

そして、思った。

「…撮影道具、先週どこにしまったかしら…」

十分後。

「あれ、ここにもない…」

私は未だ、探し物を続けていた。

「おかしいわね…いつもならあそこかここにあるはずなのに…」

撮影機材は、見つかっている。

「というか、むしろそれは、常に自室の机の上に置いてるし。見つからないのは、服。」

「ちよつと…あれがないと私、配信できないじゃない。どうすんのよ、全く…」
と、その時。

先週の自分の行動を思い出す。

「……そうだったわ」

向かったのは、春物の洋服たちが仕舞われている箆筒。

丁寧に畳まれ、重ねられたそれらの最深部に、探し物はあった。

「…折角だし今日は、このことを話してみようかしら」

服が見つかったことには反応せず、私はポツリ、そう呟いた。

そして、夜になった。

「ハ〜イ、リトルデーモン諸君、一週間ぶりね。元気にしたかしら？」
時間になり、毎週行っている配信を始める。まずは、挨拶から。

『こんばんは〜、ヨハネ様〜！』

『ばんわ！今日も決まっていますね！』

『ヨハネちゃん、待ってたよ』

「オーケー。いつも通り人も来てるし、早速始めていきましようか」

そこから、“墮天使ヨハネ”として皆の質問に答えるいつものコーナーへ。

特に問題も起こらずに進んでいく。

「…じゃあ次よ。リトルデーモン13号、カステラ食べたいちゃんから。

えつと… “今のヨハネ様に悩み事はあるんですか？”…」

『どうなんだどうなんだ??』

『知りたいですねえ… あ、今北です』

「(どうしようかしら。この際話してみるのも… でも、なあ…)」

『ん？ヨハネ様?』

『え、止まったのか?』

「あ、止まってないわよ、心配しないで」

『なんだ、』

『それで、悩み事は??』

「ふつ、私のことを誰だと思ってるのよ。悩み事なんてあるわけじゃないでしょう?」

『ですよーw』

『なんとなく予想出来てたよな』

「…でも、」

『?!?!?』

『おっ?』

「…私の周りには、そんなものを抱えた人間がいっぱいいるわね、同情するわ」

『ヨハネ様の同情ホスイ…』

『初見です、こんばんは!』

『初見さんいらしゃい』

『例えばどんなく?』

「(来たわ!)」

…:そういうえば一人、大学の進路に悩んでる人間がいたわね、馬鹿みたいに」

『進路かあ〜』

『そんなことより次いこうぜもう』

『いやいや、折角だし詳しく聞いてみよ』

「ん〜、詳しく聞いてみたい人いるの?」

『ノ』

『(. 3.)ノ』

『ノ』

『へ』

『ノノ』

「…仕方ないわね、じゃあ、少しだけよ」

そこから私は、自分の悩みについて話す。

高三なのに、まだ将来のビジョンが見えないこと。

友達はどう、進路を決めて動き出していること。

まるで自分一人だけ取り残されているみたいで、孤独を感じることに。

「…ねえ、アナタたちなら、そんな人になんて言う？」

『知らねw』

『うくん… その人の好きなことは何なの？』

「好きなこと、ねえ…」

俗に言う、好きなことを仕事にするのが一番、というやつか。

でも私は、知ってる。

世の中そんなに、うまくはいかないものだ。

ホントに好きなことを将来形にするなんて、大抵の人は不可能だと。

『ねえ、さっきのつてヨハネ様本人の悩みでしょ』

『それな』

「なっ、そんなわけないでしょう!？」

『バレバレ乙々』

『じゃあ、ヨハネ様の夢は？何かあるんでしょ?』

「私の、夢…?」

『何だろう?』

『…ほら、やっぱりないじゃんw』

「あるわよ！あるに決まってるでしょ！

夢は、私の夢は… 皆の、アイドルになることよ」

アイドル。

どうしてそんなことを口走ったのか、自分にも分からない。

誤魔化したくて、テキストに口にした言葉。

それが、アイドル。

普通に考えて、“世界征服よ!”とかが一番マシな気がするのに。

どうして、“アイドル”なんて言ったのか。

自分の気持ちだが、ホントに全く分からない。

ただ、一つ言えることは。

これを口にして、何故か自分の中で何かが晴れたような、そんな気持ちになったということだ。

『本気で言ってるの、それ?』

最初にコメントに書かれたのは、そんな言葉だった。

『軽い気持ちでアイドルになりたい、なんて言うもんじゃないわよ』
続けて、そう打ち込まれる。

『お?なんだ?』

『ドルヲタきてんのか?』

コメント欄に書かれる、煽り文句。

一方で私は、その人から次にコメントがくるのを何となく待っていた。

が。

結局、それ以降その人のコメントは打ち込まれることはなく。

そしてそのまま、私の生配信も幕を閉じることになった。

翌日。

「…あ、善子ちゃん、おはよう」

朝、登校するといつも通りずら丸に会う…。つて！

「ヨハネよ！」

「うわっ、急にどうしたずら。昨日は一回も指摘しなかったのに」

「え、そうだったけ？」

言われてみれば確かに、昨日はこれを言わなかった気もしないでもないけど…。

「あ、そうだ善子ちゃん」

「ヨハネよ」

「進路希望調査、提出したの？」

私の指摘を無視して、そう言ってくる。

「…まだ」

「そっか…。早く出して、って先生が言ってたずら」

「へいへい」

「テキトーな返事：．．．まったく善子ちゃんは、困ったちゃんずら」

「困ったちゃん言うな！てかヨハネ！」

そう言うのと、何故かずら丸は笑顔を見せた。

「：何よ、気持ち悪いわね」

「：別に。ただ善子ちゃんは、こうでなくちゃな、って思っただけずら」

……。

変なずら丸。

「：…ていうか、善子じゃなくてヨハネよ！」

「えく、まだ言うずら：．．．？」

「あんたがそう言わないからでしょ？」

「でも正直、『ヨハネよ！』っていうツツコミ、気に入ってるでしょ」

「は：．．．？そ、そんなわけないじゃない！」

「：バレバレずら」

「ふ、ふざけたこと言っていると、ヨハネ怒るわよ！」

「はいはい」

「ちよつと、真面目に取り合いなさいよ」

「あ、そうだった。久し振りに今日、ルビイちゃんと放課後カフェにでも行こうって言うてただけど、善子ちゃんも来る？」

「…なによ、ホントに突然ね」

「来る？」

「…あんたがどーしても来てほしいって言ったらね！」

「じゃあ、決まりずら！放課後、ルビイちゃんが教室に来るまで待つてるんだよ？」

「ちよ、勝手に決めないd——」

「じゃ、私は先生に仕事頼まれてるから、また後でね！」

「ちよつと、ずら丸——って、行っちゃった」

全く… 朝っぱらから元気なんだから。

放課後三人でカフェに、なんて、いつぶりだろうか。

「まあ別に、暇つぶしなだけなんだけどね！」

そんなことを言いながら、私はずら丸が向かっていった後を追いかけるようにして、学校へと歩みを進めるのだった。

…昨日までとは、また少し違った足取りで。

私の夢は

「…で？」

「なんざら？善子ちゃん」

「ヨハネよ！それで…なんで、理亞までここにいるのよ！」

「何、いちゃ悪いって言うの？」

そう。

ずら丸とルビイに連れられてきたはいいものの、なぜかそこには理亞も。

「いや… だつてあんた、学校は？」

「そんなの… 夏休みに決まつてるでしょ」

「な、夏休みい!？」

「…ちよつと、ルビイたち、善子に何も教えてなかったの？」

「ごめんね、理亞ちゃん。最近善子ちゃんとは話せてなかったから…」

「予定立ててたんだし、前もつて教えとくでしょ、普通」

「何？何なのよあんたたち?!私を置いてけぼりにする気？」

「ごめん善子ちゃん、今から説明するね」

「分かったわ。あと、ヨハネね」

* * *

それから。

最近の私になんとか元気がなかったこと。

理亜が、とある用事で静岡の方に来るとかで、折角なら久々に会おうとなったこと。私の気分も、何か新鮮なことが起きれば良くなるんじゃないかと二人が考えたこと。

また、今の夏期特課が終わって本格的に夏休みに入ると、私と会うことはさらに減るだろうということ。

これらが集まって、今この状況になった、ということらしい。

「いや、ちよつと待ちなさいよ。

最近の私に元気がなかったってそれ、本気？」

「…やっぱり自覚ないんだね、善子ちゃん」

「だから、ヨハネよ」

「そう、それすら」

「は？」

「その、『ヨハネよ』ってやつ。

「マルは今日久し振りに聞いて、ここ一週間くらいはそれ、言っ
てなかつたんだから」

「…え？ いや… 流石に嘘でしょ？」

「嘘じゃないぞら。ねえ、ルビイちゃん」

「ずら丸のその言葉に、うんうんと首を縦に振るルビイ。」

「一方の理亞は、というと。」

「何、その元気の有る無しの判断… バカなの？」

「ずら丸の言っていることを、理解できないという様子だ。」

「…それで？」

「ん？」

「私が理亞に会ったわけだけど、どうなのよ」

「どうなのよ、って、それは善子ちゃん自身の心に聞いてみないと分からないぞら。」

「でも、」

「と、そこでずら丸は言葉を切る。」

「なによ」

「今日の善子ちゃんは、今までと比べてなんだか元気に見えるすら。」

だからもう、心配いらなくなつて、マルは思つてるすら」

私の目を見ながら、自信をもっているように話すすら丸。

「そう」

私はなんだか恥ずかしくなつて、そんな短い言葉だけを返す。

「…それで？」

今度は理亞が、口を開く。

「あんたは、何に悩んでたのよ？」

鋭い質問を投げかけられた。

「元気がない…なんて、悩みごとか何かでしょ。」

それが解決したから、今は大丈夫なんじゃないの？」

確かに、その通りなのかもしれない。

自分の中では分かつていないつもりでいたが、理亞の言う通りなのだろう。

…いや、違う。

私は、自分の中の悩みを、認めたくなかつたのだ。

悩み事は、弱者が抱えるものだと思っ

ていて、私自身の弱さを、自分で認めたくはなかつた、と、そういうことに違いない。

「…善子ちゃん？」

ふと声をかけられ、そちらを見ると、ずら丸の顔がそこにあつた。

心配そうな顔。

ずら丸のこんな顔は、これまで一緒にいて、なかなか見てこなかつた。

「…何よ、そんな顔して」

「……」

「(ちよ、やめてよ、そんな顔…)」

「…悪かつたわね、心配、かけちやつて」

「もう元気になつてくれたから、マルは、安心したよ」

「…安心してるって言うんなら、そんな顔するのはやめなさいよ」

「…ごめん、なんかマル、ちよつと変みたい。お手洗い、行つてくる」

私たちにそう言つて、席を立つずら丸。

「…全く、困つたやつね」

私がそう呟くと。

「何言ってるのよ、あんた。」

今回の件、花丸は考えられないくらい行動力があつたのよ」

「…え？」

「うん！花丸ちゃん、ホントに善子ちゃんの様子を心配してて、だから…」

私の疑問の声に、そう答えたのはルビィ。

「そもそも私、あそこまで頼まれてなかつたら、今日はまだ北海道にいたはずよ」

続けて理亜も、私にそう言う。

「そう、なのね…」

自分がここまでずら丸に影響を与えていたなんて考えてもいなかった私は、そんな短い言葉しか言えないのだった。

そのうちずら丸が戻ってきてから、私たちは注文していたものを口に始める。

「…そういうえば結局、善子は何を悩んでいたのよ？」

唐突に、理亜が尋ねてくる。

「え、その話続けるの…？」

「当たり前でしょ、ここまで人に心配かけたんだから、それくらいは」

そう言われ、思わずずら丸の方を見ると、

「将来のことでしょう？善子ちゃんの悩みって」

と言われた。

それに驚いていると、

「分かるに決まってるずら。長いこと一緒にいたんだもん」と。

「…ふうん、それで、解決したの？」

ずら丸の言葉を聞いた理亜は、私にそう聞いてくる。

私は、迷った。

実際のところ、将来のことに対する悩みが消えたかと言えば…そうではないはずだ。

ただ昨日、動画の生配信中に言った一言が、私の肩を軽くした、それだけだ。

こんなことを、話す必要はあるのか。

ついでに言えば、昨日の一言は“皆のアイドルになること”だ。

この三人がいる中、特に理亜の前で、こんなことを言う勇氣は私にはない。

だから、とりあえず…

「…まあ、解決したっちゃしたんだけどさ…。

ところでアンタたちは、確かもう決めてたわよね？進路」
はぐらかして、話題をそらす。

「もちろんでしょ、てか、この時期に決まってる善子がおかしいんじゃないの？」
「それは、言わないでよ…。」

さつきから思っていたけど、理亞ってずけずけとモノ言いすぎじゃない？
なんか、敵をいっばい作ってそうね…。

「…何？言いたいことでもあるの？」

私のそんな視線を感じてか、理亞がそう切り返してくる。

「いや、ただ… ヨハネって呼んでくれないかなあ、って」

「そんな変な名前で、呼ぶわけないでしょ」

変な名前… コイツ、調子に乗らせておけば…！

…なんてこんなこと、理亞に言えるはずもなく。

「えっと確か、ずら丸が文学部、ルビイが教育学部、って言ってたわよね…？」

これ以上理亜と絡んでいても怖いので、私は、他の二人に話を振る。

「うん、そうすら」

「…文学部って、何するのよ？」

「本に囲まれて生活…こんな幸せなことはないすら」

「あー、そうね。あんたにとってはそうでしょうねー。」

…ルビイは、学校の先生に…？」

「うん…家庭科の先生になれたらいいなって…」

「絶対いけるわよ、裁縫もできるし、料理も得意じゃない」

「えへへ、ありがと…ルビイ、頑張るよ！」

「ええ、がんばルビイ、ね」

「…それで？」

「…なによ」

「…なによ」

「理亜は、どういう進路を目指すのよ？」

「…それ、言わないとダメ？」

「いや、別に。言いたくないならいいのよ、別に言わなくても」

「…何よ、その言い方。悪意しか感じないわ」

「そうかしら?」

私は、理亞を煽る。

これまでの仕返しという思いを込めて。

しかし、次に理亞の口から零れてきた言葉は、私をすごく驚かせることになる。

「…アイドルよ」

「…えっ?!」

「聞き返さないで。アイドルって言ってるの」

「えええっ!?!」

「ちよっ、何その反応、私にはできないって言いたいの?」

「あ、いや、そういうことじゃないけど…」

…まさか理亞が、アイドルを本気で目指しているんて。

『…遊びじゃない!』

その時、理亞が昔言った言葉が私の頭をかける。

「(…もしかして理亞は、あの時からアイドルを目指して…?)」

「確か理亞ちゃんは、そのオーディションの為に静岡に来たんだもんね!」

ルビイが、そんなことを言う。

「ル、ルビイ！それ言わないで、つて！」

「あつ、ごめん、つい言っちゃった…」

「オーディションの為に、静岡に…？」

私が聞くと、少し恥ずかしそうに理亜は話し始めた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「矢澤さーん、2番テーブルと5番テーブルの皿、片付けお願いするわ」

「了解です〜！」

「あつ、その後、44番テーブルのオーダーもお願いできるかしら」

「2と5のあとに44ですね、分かりました！」

夕刻。

昼過ぎの頃のゆったりとした雰囲気から一変、忙しくなった店内。

私は、アルバイトとしてこのファミリールレストランで働いていた。

「(やっぱり、この時間帯は忙しいわね…！)」

先輩に言われた仕事を、テキパキとこなす。

働くのは嫌いじゃない。

だってその間は、嫌なことも忘れられる気がするから。

お客さんのために、迷惑をかけないよう必死で。

そしてそれが、自分のためにもなる。

まあ、でも。

こんなことを考えられるのは、仕事の環境が悪くないからなんだろうけど。

それから時間は流れ、私の働く時間も終わりになる。

「では、お疲れ様でした〜！」

「お疲れー、明日もまた、よろしくねー」

「はい、もちろんですー！」

短いそんな会話を交わして、私は帰路につく。

その途中。

買わなければならなかったものがあるのをふと思い出し、近くの電器屋へ入る。

「えっと確か…こつちの方だったはずよね…」

目的のものを探し店内をうろつく。

「ん〜…あ、あったあった」

商品を手にとった私は、レジの方へ足を向ける。

が、その足が止まった。

そこは、テレビが大量に並べられているゾーン。

画面に流れているのは、とあるテレビ番組の宣伝のようだ。

内容は『A氏が新たなアイドルグループを作る』というもの。

そのオーディションの様子を、テレビで独占的に放送するらしい。

「……」

テレビの中で、芸能人がその宣伝をする様子を何となく眺めていた私だったが。

こんなことをしている暇はなかったのだと思い直し、再びレジの方へ歩みを進める。

途中、耳に“静岡”というワードが入ってきて、ふと一度そちらを振り返ったが、自分を感じた違和感の正体は分からないまま、その後私は、店を後にするのだった。

にこside

私、矢澤にこは、高校卒業後、アイドルになるために芸能界入りした。

A—R—I—S—Eに勝ち、全国の頂点に立ったμ's。

そのメンバーということで、業界からの注目もかなり大きかった。

しかし、それはあくまで“スクールアイドル”においての話。

芸能界に入れば、そんなことは関係がなくなる。

そこからは、アイドルとしての下積みをつくる日々が始まった。

厳しいレッスンに耐えられず辞めていく人も、数は少なかったもの、やはりいた。

ただ、既に“アイドル”として自分がどうあるべきかが分かっていた私にとって、その日々は全く苦ではなかった。

そして…その努力が実ることになる日が来た。

同年であり同期生だった四人と一緒に、“BLITZ”を結成。

年が明け、遂に私は念願のアイドルデビューを果たす。

付け加えると、デビューシングルではセンターでの歌唱。

自分にとってみればまさに、大成功、と言える幕開けとなったアイドル生活。

しかし、そう簡単にうまくいく世の中ではない。

デビューしたばかりの頃は、それこそテレビ出演の機会も多かったが、それも日が経つごとに減少。

また、私にとって悲しい結果となったのが、第一回人気投票。

2ndシングルセンター争奪戦として銘打たれた投票で、皆、運動に力が入った。

ネットを使つての生放送で発表された投票結果。

残念ながら私の得票数は、五人中三位。

一位とも大きく離され、すぐく悔しい形になってしまった。

そして、事件が起こる。

それは、2ndシングルの発売を目前に控えた日のこと。

グループのリーダーだった小野辺智江が、交通事故で亡くなった。

智美はその日、リーダーとして2ndシングル宣伝の仕事を一人で任されていた。

それは、智美が先の人気投票で一位に輝き、センターを獲得していたからでもあった。

その仕事の帰り。

乗っていたタクシーが、信号無視で交差点に突っ込んできたトラックに撥ねられた。

信じられなかった。

日が経てば、また智美の元気な姿が見られる、そう考えもした。

だが当たり前ながら、死んだ人間は生き返らない。

そうしてリーダーのいなくなったBLITZ。

これからどうしようか、と画策していた時。

更にBLITZに、不幸が襲い掛かる。

人気投票二位だった橘璃々乃の母が、重い持病を再発させ長期入院することに。

璃々乃は、最初の頃こそ母の世話とアイドル活動の両立を試みていたが、半月ほどたった時に、BLITZからの脱退を表明した。

後から聞いた話だと、璃々乃の両親は離婚していて、また、母の容態も芳しくなかったため、母の様子をしっかりと見てあげられるのが璃々乃くらいしかいなかった、らしい。

二人がいなくなり、さらに路頭に迷うことになった私たち。

立て続けに起こったこの二件で、社会からは同情の視線が向けられた。

が。

それだけで終わらないのが世論というもの。

一部の間では、“にこの呪い”ということが囁かれるようになっていたのである。

元々センターでの歌唱に並々ならぬ思いを注いできた私だ。

そういう風を受け止められるのも仕方のないことなのかな、と思わされた。

しかし、ここから人々の間で論争のようなものが巻き起こり始める。

そういう呪いのような力が働いたのだ、という人たち。

そんなことを悲しい出来事を味わった彼女たちに言うのはふざけている、という人た

ち。

意味不明に始まったこの論争は、残った私たち三人に当たり前のように影響を与え

る。

その中で最も大きかったのは、さらなるメンバーの脱退だった。

それは、いきなりのことだった。

メンバーの一人、轟アリスは、全国で有名な家系の生まれで、元々アイドルになることを反対されていたのだが、今回の件を受けて、辞めさせられることになってしまったのである。

ここまできて、BLITZが活動を続けられるわけもなく。

たった半年で、私はまたスタートラインに戻るようになってしまった。

そんなことがあって、私の心は少し変わっていた。

ネットでは未だに蔓延り続けていた私へのデイス。

それに何故か、対応する気すら起こらない。

テレビでやけに悲劇的に表現される私たちBLITZの解散。

それに対して、もはや何の感情も起こらない。

いつしか、私のこころは冷めきってしまったのである。

その後私は、所属事務所を辞めた。

そして、保育士養成専門学校への入学をすることに決めた。

試験に無事合格し、高校卒業から二年経った春、私は久しぶりに学校へ通い始めた。そこからの三年間は、とても濃厚なものだった。

心理学的なことだったり、子どもの保育についてだったり。

また、ピアノの授業もあって、それは真姫ちゃんにけっこう教えてもらった。

もともと、子どもが好き、という理由で保育士を考えて、資格を取ろうと思ったわけだけど、色んなことを学んでいく内に、どんどん憧れも大きくなっていった。

そして三年制の専門学校を無事にしっかり卒業して、すぐに就職

…というわけでもなく。

その後、私は保育園には就職せず、アルバイトを中心に生活することにした。

この頃仕事に追われていたママの代わりに、妹と弟の世話をやることに決めたのだ。とはいえ、彼らはもう小学校高学年になっているわけで。

子供のようで大人になっている妹たちに余計に絡む必要もないように思えた。

まあ、何が言いたいのかというと。

要するに、結構ヒマになってしまったのである。

* * * *

「…今日も、他に用事もないし、聴こうかしら」

私はそう呟きながら、自分のパソコンを開いた。

その画面にはちょうど、いつも見ている一人の少女…いや、墮天使ヨハネの姿が。『今日も始めるわよ、リトルデーモンの皆。準備はいいかしら?』

この故に出会ったのは、確か約一年前くらい。

学校が夏休みに入って時間が空いていたため、私はネットで、何か時間が潰せそうで面白そうなものを探していた。

そこで偶然出会ったのが、この墮天使ヨハネだ。

実は、私はこの娘を知っていた。

いや、正確に言うならば、この娘の正体を、だろうか。

この粉の名前は、静岡でスクールアイドルをやっていた、A q o u r s の津島善子。

アイドル界から離れたといっても、私の心はやはりアイドルを想っていた。

いや、むしろ、あそこまで没頭しておいてなかったことにする方が、無理な話だと思
う。

私の想いは、自身が最も輝けていたであろう、スクールアイドルへと向けられた。
追っかけとは言わないが、スクールアイドルについての情報は基本的にほとんど頭
に入れていた。

その中で、私が専門学校二年生の時に優勝したのが、Aqours。

Aqoursは、私たちμ'sと同じように、九人で結成されたスクールアイドル。

また、結成の動機も私たちと同じように学校を廃校から救うため。

残念ながら、Aqoursの通う学校は統廃合になってしまったみたいだけど。

他のグループと比べて共通点も多く、気にかからないわけがなかった。

そして、津島善子。

自分のことを“堕天使ヨハネ”と称するなど、ちよつと変わった娘。

しかし私は、その娘のことをただの変な娘で片付けようとは思えなかった。

彼女の“堕天使ヨハネ”は、設定、と言われる類のものなのか。

なんだか、すごく気になった。

その翌年の夏に、彼女の生配信を動画サイトで偶然見かけた。

そこから私は、特に用事がない時にはその配信を見るようになったのである。

『今日はワタシ、一つアナタたちに報告しておきたいことがあるの』
それは、突然のことだった。

『私：：アイドルになるわ！』

思考が止まった。

他の視聴者も私と同じなのか、コメント欄の流れが止まる。

『ずっと考えていたの。』

私を、この墮天使ヨハネを、全世界の人々に愛してもらおう方法を』

画面越しにいるこの娘は、正気でこんなことを言っているのか。

『アイドルの頂を取って、この私の名を世界に轟かせるのよ！』

それが：：私のホントの夢だったのよ。

：：こんなふざけたこと言ったら、アナタたちは呆れるかもね。

でも、私はもう決めたの。逃げないわ、成し遂げるまでは。絶対にね』

力強く、そう語る彼女の目からは固い意志が感じられた。

それと同時に、私の背中も押されたような、そんな気持ちになった。

そして、私は――。

そして私たちは

とある雑誌のインタビューを受ける、二人の女性。

片方は、ツインテールがよく似合っている、小柄で可愛らしい女性。

もう一方は、頭の右上に作ったお団子が特徴的である、色白で綺麗な女性。

二人の後ろには、

『史上初！現二大アイドルグループのリーダーの共演！』
とある。

まず、矢澤さん、と記者らしき女性に呼ばれたツインテールの女性が話す。

その際、にこよ、と呼び名を訂正することを忘れない。

「そもそも私は、アイドルにも元から憧れていたんです。

実際、高校の頃からスクールアイドルをやっていた」

ここで記者が、μ'sですよね、と意を得たばかりに口を挟む。

ええ、と笑顔で相槌を打ち、さらに続ける。

「それで、高校卒業後はアイドル事務所にも入って、プロアイドルとしての活動を始めていたんですけど、そこで色々あってしまって、一時はこの世界から離れました」

その複雑な表情から察したのか、二人は黙ってその女性の話を聞き続ける。

「それでそんな時、偶然出会ったのがこの、ヨハネの生配信だったんです」

そう言いながら、隣の女性に目をやる。

「暇つぶしがてらに見てたんですけど、そんな日にとあることがありまして。

そこでヨハネがいきなり、プロアイドルとしてデビューするって言ってたんです。

それで私、ビックリしてしまって。と同時に気付いたんです、自分の気持ちに」

「にこさんの気持ち：：ですか？」

そう、記者は尋ねる。

「はい。」

：：私は、自分の幼い頃からのアイドルという夢を、無理に忘れようとしていたんです。

色々悲しいことが重なった結果に、自分を抑え込もうとしている事に気付けたんで

す」

そうですか：：という相槌に、首を縦に振りながら話を続ける。

「だから私、ホントにヨハネには感謝してるんですよ」

そう言い、満面の笑みを隣の女性に向けるにこ。

その流れから、次に話し始めるは先程からヨハネ、と呼ばれている女性。

記者には津島さんと呼ばれ、ヨハネで、と訂正をしている。

似た者同士の二人なのか。

「私は、そうですね……正直に言ってしまうえば、アイドルというものに興味を元々持っていたとか、そういうわけではありませんでした。

ただ私自身……いや、これ以上は恥ずかしいのでやっぱりナシで（笑）」
なにかを言おうとした様子だったが、恥ずかしい、と話を切る。

それに対し、他の二人は追及を続ける。

折れたのは、ヨハネの側だった。

話題にしたのは、スクールアイドルの話。

そう、先程のことに同じように、ヨハネも実はスクールアイドルをやっていたのだ。

「スクールアイドルは……先輩から誘われて、でした。

私はその頃、というかそれ以前から、堕天使ヨハネという名を名乗っていて、
というかそれが本当なんですけど……。

まあそのせいで学校内に友達もいなくて、色々人間関係とかに困っていたんですよ

ね」

二人は、所々で苦笑を浮かべつつも、黙って聞き続ける。

「そこで、とある一人の先輩に言われたんです。

そのままでいいんだよ、って。そのままがいいから私達と一緒にスクールアイドルをやろう、って。

私はその時、何だかすごく救われた気がして、それで、力を貸すことに決めたんです」
そこから、A q o u r sとしての活動が始まって…と続ける。

「私は、スクールアイドルを始めて、なんだか心の整理がついた、と言いますか…。それから不思議と、学校生活の方も普通に過ごせるようになっていったんです。

墮天使ヨハネとしての自分を解放できる、そしてそれを受け止めてくれる、そんなA q o u r sとの出会いは、やっぱり私にとってはすごく大きな分岐点だったように思えますね」

なるほど、と頷く記者とにこ。

なかなか知られていない裏話だけに、聞けることはかなり貴重である。

「中でも本当に、リーダーの先輩には感謝しきれないな、っていう気持ちで」
「確かリーダーは、二年生の…？」

「はい、そうですね。その人は、自分の事を全く分かってなくて。

自分が「普通」であると思ひ込んで、それに悩んでいたんですね。でも、そんな彼女を変えたのは、にこさんのいるμ'sだったんです。

μ'sの姿をたまたまTVで見かけて、そこから憧れを持つて。直向きに、走り始めたんです」

あ、私語りすぎてますね、と笑みを浮かべて頭をかくヨハネ。

それほど、Aqoursのリーダーへの感謝は抑えきれなかったということだろう。そして記者は、ここぞとばかりににこに話を振る。

もちろん話題は、μ'sについて。

先程たくさん語った自分の恥じらいを隠すためか、ヨハネもそれに同調する。

しかし今度は、にこが恥じらうターン。

なかなか話そうとはしないようだ。若気の至り、だからこそだろうか。そうしてしばらくの後。

にこの重たかった口がようやくやく開き始める。

「…私は高校一年の時、まず自分の意思でスクールアイドルを始めました。

そこには、生半可な気持ちなんて微塵もなく、ただただ頂点に立ちたいと、そう思っていたんです。

ですがその結果、一緒にやっていた同級生たちは私の気持ちについてこれなくて：いや、私が勝手に突っ走っていったせいなんです、やめてしまってます」

そこからはアイドル活動は行わず、他のスクールアイドルたちを見て楽しむようになりまして、と続けて言う。

「それでは：： どういう経緯で再びスクールアイドルの世界に？」

「はい。えつと：： すごい偶然なんです、私もヨハネと同じように、リーダーに背中を押してもらったんです。」

その頃の私は、すぐくとんがってて（笑）

スクールアイドルを興味本位で始めた彼女たちによく、突っかかっていたんです。

でも：： ある日、そのリーダーの子が私に手を差し伸べてくれて、それで気付いたんです。

私はやつぱり、スクールアイドルとしての活動をやっていきたいんだ、って」

話してみても思いましたけど、私っていつも年下の子に助けられてるんですね、と笑いながらにこが言う。

* * * *

雑誌のインタビューも、そろそろ佳境。

話題は、プロアイドルデビューのきっかけに移っている。

私、実は元々アイドルになる予定なんてなかったんですけど、と前置きしてヨハネ。「とある友人が、プロアイドルのオーディションがあるとかで、何となく見に行ってみました。」

「したらそこで、とある方にお声がけいただいて、その方が私の今いるグループの創設者の方で」

「そんな漫画みたいな話本当にあるんですね、と記者。」

「はい（笑）」

「でも、初対面でいきなり、『君の本性をもっと曝け出す気はないかい？』でしたからね。」

正直なところ、怪しさ全開だったんですけど」

笑いながら話すヨハネ。

「でもやっぱり、自分の事を認めてもらえたというか、許されたというか。」

とにかくなんだか、この人についていったらこれから楽しそう、なんて思いました。

それが、私の始まりですね」

では、にこさんは、と記者が問う。

「前にも言った通り、私は一度アイドルとしてデビューしていたので、その伝手を手繰り寄せて、引っ張って、色々足掻いてみた結果、今がある……という感じでしょうか。

まさか、現在ののような状況になるとは思ってもみませんでしたね」

そうなんですか？と、記者が驚いたように問い返す。

「いや、だってそうでしょう。

ほとんど何も無い手探り状態から始まって、今のようないただけの人気のままから。本当に、グループ創設者のあの方には感謝してもしきれないな、って思うんです」

にこのこの言葉に、ヨハネも反応する。

「そうですね、ホントに。

あの方の企画力というか、才能というか、そのおかげで今の私たちはあると思ってるので」

二人してこんなに褒めて、すり寄ってるとか思われたら嫌ですね、とにことヨハネが笑う。

では最後に、と記者がまとめに入る。
まずはヨハネから。

「この度は、このような機会をいただけたこと、本当にありがとうございました。

にこさんは、私の中でも大きな存在で、そんな方がまさか私のことを頼りにしてくれていたなんて思っていなくて、正直今でもビックリなんですけど……。

いつもは争い合う立場のグループ同士、そのリーダー同士ということでしたが、これからはこういう機会も増えていけばいいな、と実感しました。

では、今後とも私ヨハネ、そして所属グループの応援をして下さると嬉しいです。

今回は本当に、ありがとうございます」

アンタはやっぱりこういうところでは真面目なのね、と笑いながら続けて話すのは、
にこ。

「は〜い、皆さん、宇宙ナンバーワンアイドルこと、にこです〜！

今回は、ヨハネとの対談、すつごく楽しませてもらいました〜ふつうは聞けないような話も聞けたりして、にこは大大満足です〜！

ヨハネも言ったように普段は競い合う立場のグループですけど、仲良くするのもやっぱり良いな〜か思ったり、思わなかったり（笑）

ということ、これからもにこのこと、応援してくれると、嬉しいな〜！

もちろん、私の所属するグループも、ですよ？では。今回は、ありがとうございます
た〜！」

はい、ありがとうございます、という記者の言葉で、場の雰囲気は落ち着く。

最後にツーショット写真と握手を、と言われ、顔を見合わせる二人。

その顔に浮かんでいるのは、どういう感情か。

これから、日本のアイドル界、ひいては音楽界の中心となっていくであろう二人。

二人の未来に広がっているのは、希望かはたまた絶望か。

ただ、満面の笑みで握手を交わし、写真に写る二人には、どちらが待ち受けているの
かは明瞭のような気もする。